

# 英米文学鳥類考：ハトについて

榊田 隆宏

(人文学部人文学科欧米文化コース)

## A Study of Birds in English and American Literature: the Dove

Takahiro MASUDA

(Department of Western Cultures, Faculty of Humanities and Economics)

### (一)

「ハナ、ハト、マメ」。七十年以上も昔、大正四年生まれの私の母が小学校の国語教本で習った言葉であるが、ハトが人間にとって昔から親しみのある身近な鳥であったことは、どうも時空を越えて共通する事実のようである。なにしろ、「ハト科には約二百八十五種があり、両極地方を除いて世界的に分布している」<sup>(1)</sup> というのだから、それもむべなるかなである。ハト科は種類が非常に多いけれども、『英語歳時記』によれば、ヨーロッパで最も一般的なハトは ring dove (または wood pigeon=ジュズカケバト)、rock dove (カワラバト)、turtle dove (キジバト) の三種であり、北アメリカでは悲しげな声でなく mourning dove が多い<sup>(2)</sup>、とのことである。ちなみに、英語の dove の語源は dive (ハトの頭の動作からの連想) にあり、日本語のバトの語源はこの鳥が飛ぶ時にたてる大きな羽音「はた、はた」にある<sup>(3)</sup> ようだが、そう言われてみれば全くその通りである。

普通英語でハトと言えば、<pigeon>か<dove>であり、両者の間には「はっきりした区別はない」<sup>(4)</sup>とされているが、一般に前者が「飼いバト」を意味するのに対して、後者は詩語で「小型の野生バト」を意味するようである。試みに手元の『講談社和英辞典』でハトの項を見てみると、「a pigeon; a dove 《pigeon の方が一般的な語、また汚い感じを与える。dove の方が上品な語》」<sup>(5)</sup>と述べている。こうしたイメージのためかどうか、英語の本場である英国では pigeon の方が一般的な語であるにしても、西洋の文学や美術の世界に登場するハトは pigeon よりも dove の方が多いようである。ちなみに、フリースの『イメージ・シンボル辞典』にあたってみても、dove と turtledove の項はあるが、pigeon の項は見あたらない。つまり、dove がハト科の総称として用いられているのである。また聖書に登場するハトも turtledove を含めれば dove が四十六箇所であるのに対して、pigeon は十二箇所である。

とはいえ、旧約聖書というのは元々ヘブライ語で書かれたものであり、それを英語に翻訳した『欽定訳聖書』では、もとの<ハト>をさすヘブライ語の言葉を、あるときは dove、またあるときは pigeon と英訳しているのも、特に両者を区別する意図はなさそうである」<sup>(6)</sup>という指摘がある。したがって、聖書で使われている pigeon と dove の区別に、もし何らかの意図や意味があるとすれば、簡明に言って、前者が公園や社寺で群れている地味なハトを連想させるのに対して、後者は手品師が用いる小型で可憐な白バトを連想させるという点にあるのではなからうか。換言すれば、<dove=白バト>という暗黙の了解と前提に意味があるのである。クレベールは『動物シンボル事典』の中で「colombe [dove] は鳩の種類としては<かわらばと>と呼ばれるものに対応

するが、象徴的には、むしろ〈白い鳩〉、そしてこの語が女性名詞であることから、女性名詞で表現されるものの象徴として使われる。その点が pigeon と異なる」<sup>(7)</sup>と述べている。イメージやシンボルの世界では色が重要な役割を果たしていることを考えれば、〈ハトの白きこと〉を抜きにして〈白い鳩〉を語れぬことは確かである。メルヴィルが『白鯨』の中で、わざわざ一章をもうけて「鯨の白きこと」(四十二章)に触れているのは、イメージやシンボルの世界に於ける色、とりわけ白色の重要性を示す証左である。以上のことを念頭において話を進めたい。

## (二)

さて、フリースの『イメージ・シンボル辞典』によれば、ハト (dove) の項は二十八項目にも分かれ、その主な内容を拾ってみても、「大空一天国」、「大宇宙の万物の母、豊饒の女神」、「魂」、「神託」、「復活、再生」、「愛の悦び」、「平和」、「清浄、無垢」、「臆病」、「お人好し、ぼんくら」<sup>(8)</sup>と多岐にわたる。とはいえ、これらのイメージやシンボルの中で最も有名なのは、〈ハト=平和の象徴〉というものではなからうか。フランス人のクレベールは「今日では、人も知るとおり、鳩は平和の象徴である」<sup>(9)</sup>と断言しているが、我が国の『広辞苑』を紐解いてみても、この鳥に関して「①ハト目ハト科の鳥の総称。ほとんど全世界に分布し、約三百種。全長二十～八十センチメートル。嘴(クチバシ)は短く厚みがあり、体はずんぐりしている。日本にはカラスバト・キジバト・シラコバト・アオバトなどが分布。また、カラバトが家禽化され、伝書用・観賞用・食用など多くの品種がある。それが野性化し、都市周辺などに多い。平和の象徴とされる」<sup>(10)</sup>と解説している。では、どうしてハトが平和の象徴となったのであろうか。先ず、この点から考えてみたい。

普通キリスト教国で単数の〈本〉という名詞に定冠詞をつければ、聖書を意味するという周知の事実からも理解できるように、様々な動植物に対して我々人間が抱くイメージやシンボルに於いて聖書が決定的な影響を与えているケースは少なくはない。その一つが〈ハト=平和の象徴〉というものである。このルーツは旧約聖書の『創世記』(8: 8-12)にある。大洪水とノアの箱舟を描いている有名な箇所であるが、ここは聖書でハトが最初に登場する場面でもある。具体的に見てみよう。

Also he sent forth a dove from him, to see if the waters were abated from off the face of the ground; But the dove found no rest for the sole of her foot, and she returned unto him into the ark, for the waters [were] on the face of the whole earth: then he put forth his hand, and took her, and pulled her in unto him into the ark. And he stayed yet other seven days; and again he sent forth the dove out of the ark; And the dove came in to him in the evening; and, lo, in her mouth [was] an olive leaf plucked off: so Noah knew that the waters were abated from off the earth. And he stayed yet other seven days; and sent forth the dove; which returned not again unto him any more.

(また、彼は水が地の面から引いたかどうかを見るために、鳩を彼のもとから放った。

鳩は、その足を休める場所が見あたらなかった、箱舟の彼のもとに帰って来た。水が全地の面にあったからである。彼は手を差し伸べて鳩を捕え、箱舟の自分のところに入れた。

それからお七日待って、再び鳩を箱舟から放った。鳩は夕方になって、彼のもとに帰ってきた。すると見よ。むしり取ったばかりのオリーブの若葉がそのくちばしにあるではないか。それで、ノアは水が地から引いたのを知った。

それからお、七日待って、彼は鳩を放った。鳩はもう彼のところに戻って来なかった。<sup>(11)</sup>

ノアの大洪水とは人道を踏み外した人間どもに対する神の怒りによって引き起こされたものであり、神の意図は墮落した人間を初めとして地上の「肉なるもの」全てを滅ぼし、義人ノアを中心に新しい世界を作ることにある。『創世記』によれば、神が四十日四十夜に亘って大雨を降らせた結果、天にそびえる山の頂までもが水没するほどの大洪水が発生したために、地上の生き物は全て滅び、生き残ったものはノアの箱舟の中にいたものたちだけである。百五十日たってようやく水が引き初め、箱舟はアララテ山の頂にとまった。それからなお数カ月して、ノアは箱舟からカラスを放ったが、カラスは水が地から乾ききるまで、出たり戻ったりしていた。このカラスの次にノアが放った鳥がハトである。したがって、オリーブの若葉をくわえて戻ったハトは大洪水の終了と神に祝福された新しい時代の始まりを告げる平和の使者と言えるのである。ここにキリスト教芸術に於いてハトが平和の象徴とされる由縁がある。

絵画やデザイン、ポスターなどで「オリーブの若葉をくわえたハト」がいつも白バトとして描かれているのは、既に聖書時代の昔から、その白い色に象徴的な意味が込められていたからであろう。ノアが箱舟から二羽の鳥、カラスとハトを放ちながら、最終的に洪水が地上から引いたことを彼に教えるのはカラスではなく、ハト (dove) である。つまり、色のイメージやシンボルで言えば、黒が暗闇の世界を連想させるのに対して、白は光の世界を連想させるとするなら、「(色の黒い) 鳥はまだ晴れやらぬ闇の暗さを表し、白鳩は再び戻ってきた明るさを表している」<sup>(12)</sup> と言えるのであり、したがって、ノアの洪水の場面に登場するハトは pigeon ではなく、dove (白バト) であることに意味があるのである。

### (三)

では、聖書に登場する他のハトについても見てみよう。聖書全体の中でハト (dove, pigeon, turtle [turtledove]) についての言及があるのは四十六箇所である。dove (うち turtledove という語は十五箇所) はその全ての箇所に顔を出しているが、pigeon が登場するのは十二箇所である。以下の引用文は、既に見た『創世記』の五箇所を除いた四十一箇所である。

(1) 『創世記』15・9：すると (神は) 彼 [アブラハム] に仰せられた。「わたしのところに、三歳の雌牛と、三歳の雌やぎと、三歳の雄羊と、山鳩とそのひなを持って来なさい / And he said unto him, Take me an heifer of three years old, and a she goat of three years old, and a ram of three years old, and a turtledove, and a young pigeon」

(2) 『レビ記』1・14：「もしその人の主へのささげ物が、鳥の全焼のいけにえであるなら、山鳩または家鳩のひなの中から、そのささげ物をささげなければならない / And if the burnt sacrifice for his offering to the LORD [be] of fowls, then he shall bring his offering of turtledoves, or of young pigeons」

(3) 『レビ記』5・7：「しかし、もし彼が羊を買う余裕がなければ、その犯した罪過のために、山鳩二羽あるいは家鳩のひな二羽を主のところを持って来なさい。一羽は罪のためのいけにえとし、他の一羽は全焼のいけにえとする / And if he be not able to bring a lamb, then he shall bring for his trespass, which he hath committed, two turtledoves, or two young pigeons, unto the LORD; one for a sin offering, and the other for a burnt offering」

(4) 『レビ記』 5・11: 「もしその人が山鳩二羽あるいは家鳩のひな二羽さえも手に入れることができなければ、その犯した罪のためのささげ物として、十分の一エパの小麦粉を罪のためのいけにえとして持って来なさい / But if he be not able to bring two turtledoves, or two young pigeons, then he that sinned shall bring for his offering the tenth part of an ephah of fine flour for a sin offering」

(5) 『レビ記』 12・6: 「彼女のきよめの期間が満ちたなら、それが息子の場合であっても、娘の場合であっても、その女は全焼のいけにえとして一歳の子羊一頭と、罪のためのいけにえとして家鳩のひなか、山鳩を一羽、会見の天幕の入口にいる祭司のところに持って来なければならない / And when the days of her purifying are fulfilled, for a son, or for a daughter, she shall bring a lamb of the first year for a burnt offering, and a young pigeon, or a turtledove, for a sin offering, unto the door of the tabernacle of the congregation, unto the pries」

(6) 『レビ記』 12・8: 「しかし、もし彼女が羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のいけにえとし、もう一羽は罪のためのいけにえとしなさい。祭司は彼女のために贖いをする。彼女はきよめられる / And if she be not able to bring a lamb, then she shall bring two turtles [turtledoves], or two young pigeons; the one for the burnt offering, and the other for a sin offering: and the priest shall make an atonement for her, and she shall be clean」

(7) 『レビ記』 14・22: 「また、手に入れることのできる山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取らなければならない。その一羽は罪のためのいけにえ、他の一羽は全焼のいけにえとする / And two turtledoves, or two young pigeons, such as he is able to get; and the one shall be a sin offering, and the other a burnt offering」

(8) 『レビ記』 14・30: 「その者は、手に入れることのできた山鳩か、家鳩のひなのうちから一羽をささげる / And he shall offer the one of the turtledoves, or of the young pigeons, such as he can get」

(9) 『レビ記』 15・14: 「八日目には、自分のために、山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取らなければならない。彼は主の前、会見の天幕の入口の所に来て、それを祭司にわたす / And on the eighth day he shall take to him two turtledoves, or two young pigeons, and come before the LORD unto the door of the tabernacle of the congregation, and give them unto the priest」

(10) 『レビ記』 15・29: 「八日目には、その女は山鳩二羽か家鳩のひな二羽を取り、それを会見の天幕の入口の祭司のところに持って来なければならない / And on the eighth day she shall take unto her two turtles [turtledoves], or two young pigeons, and bring them unto the priest, to the door of the tabernacle of the congregation」

(11) 『民数記』 6・10: 「そして八日目に山鳩二羽か家鳩のひな二羽を会見の天幕の

口の祭司のところを持って来なければならない／ And on the eighth day he shall bring two turtles [turtledoves], or two young pigeons, to the priest, to the door of the tabernacle of the congregation]

(12) 『列王記 第二』 6・25：「そのころ、サマリヤにはひどいききんがあった。そのうえ、彼らが包圍していたので、ろばの頭一つが銀八十シェケルで売られ、鳩の糞一カブの四分の一が銀五シェケルで売られるようになった／ And there was a great famine in Samaria: and, behold, they besieged it, until an ass's head was [sold] for fourscore [pieces] of silver, and the fourth part of a cab of dove's dung for five [pieces] of silver]

(13) 『詩編』 55・6：そこで私は言いました。「ああ、私に鳩のような翼があったなら。そしたら、飛び去って、休むものを／ And I said, Oh that I had wings like a dove! [for then] would I fly away, and be at rest]

(14) 『詩編』 68・13：「あなたがたは羊のおりの間に横たわるとき、銀でおおわれた、鳩の翼。その羽はきらめく黄金でおおわれている／ Though ye have lien among the pots, [yet shall ye be as] the wings of a dove covered with silver, and her feathers with yellow gold]

(15) 『詩編』 74・19：「あなたの山鳩のいのちを獣に引き渡さないでください／ O deliver not the soul of thy turtledove unto the multitude [of the wicked]

(16) 『雅歌』 1・15：「ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は鳩のようだ／ Behold, thou art fair, my love; behold, thou art fair; thou hast doves' eyes]

(17) 『雅歌』 2・12：「地には花が咲き乱れ、歌の季節がやって来た。山鳩の声が、私たちの国に聞こえる／ The flowers appear on the earth; the time of the singing of birds is come, and the voice of the turtle [turtledove] is heard in our land]

(18) 『雅歌』 2・14：「岩の裂け目、崖の隠れ場にいる私の鳩よ。私に、顔を見せておくれ。あなたの声を聞かせておくれ。あなたの声は愛らしく、あなたの顔は美しい／ O my dove, that art in the clefts of the rock, in the secret places of the stairs, let me see thy countenance, let me hear thy voice; for sweet is thy voice, and thy countenance is comely]

(19) 『雅歌』 4・1：「ああ、わが愛する者。あなたはなんと美しいことよ。なんと美しいことよ。あなたの目は、顔おおいのうしろで鳩のようだ／ Behold, thou art fair, my love; behold, thou art fair; thou hast doves' eyes within thy locks]

(20) 『雅歌』 5・2：私は眠っていましたが、心はさめていました。戸をたたいている

愛する人の声。「わが妹、わが愛する者よ。戸を開けておくれ。私の鳩よ。汚れのないものよ / I sleep, but my heart waketh: it is the voice of my beloved that knocketh, saying, Open to me, my sister, my love, my undefiled」

(21) 『雅歌』 5・12 : 「その目は、乳で洗われ、池のほとりで休み、水の流れのほとりにいる鳩のようです / His eyes are as the eyes of doves by the rivers of waters, washed with milk, and fitly set」

(22) 『雅歌』 6・9 : 「汚れのないもの、私の鳩はただひとり。彼女は、その母のひとり子、彼女を産んだ者の愛する子。娘たちは彼女を見て、幸いだと言い、王妃たち、そばめたちも彼女をほめた / My dove, my undefiled is but one; she is the only one of her mother, she is the choice one of her that bare her. The daughters saw her, and blessed her; yea, the queens and the concubines, and they praised her」

(23) 『イザヤ書』 38・14 : 「つばめや、つるのように、私は泣き、鳩のように、うめきました。私の目は、上を仰いで衰えました。主よ。私はしいたげられています。私の保証人となってください / Like a crane [or] a swallow, so did I chatter: I did mourn as a dove: mine eyes fail [with looking] upward: O LORD, I am oppressed; undertake for me」

(24) 『イザヤ書』 59・11 : 「私たちはみな、熊のようにほえ、鳩のようにうめきにうめく。公義を待ち望むが、それはなく、救いを待ち望むが、それは私たちから遠く離れている / We roar all like bears, and mourn sore like doves: we look for judgment, but [there is] none; for salvation, [but] it is far off from us」

(25) 『イザヤ書』 60・8 : 「雲のように飛び、巣に帰る鳩のように飛んでくる者は、だれか。 Who [are] these [that] fly as a cloud, and as the doves to their windows?」

(26) 『エレミヤ書』 8・7 : 「山鳩、つばめ、つるも、自分の帰る時を守るのに、わたしの民は主の定めを知らない / the turtle [turtledove] and the crane and the swallow observe the time of their coming; but my people know not the judgment of the LORD」

(27) 『エレミヤ書』 48・28 : 「モアブの住民よ。町を見捨てて岩間に住め。穴の入口のそばに巣を作る鳩のようになれ / O ye that dwell in Moab, leave the cities, and dwell in the rock, and be like the dove [that] maketh her nest in the sides of the hole's mouth」

(28) 『エゼキエル書』 7・16 : 「それを逃れた者が逃げて、山々に行っても、彼らは谷間の鳩のようになって、みな自分の不義のために泣き悲しむ / But they that escape of them shall escape, and shall be on the mountains like doves of the valleys, all of them mourning, every one for his iniquity」

(29) 『ホセア書』 7・11：「エフライムは、愚かで思慮のない鳩のようになった。彼らはエジプトを呼び立て、アッシリヤへ行く／ Ephraim also is like a silly dove without heart: they call to Egypt, they go to Assyria」

(30) 『ホセア書』 11・11：「彼らは鳥のようにエジプトから、鳩のようにアッシリヤの地から、震えながらやって来る。私は彼らを自分たちの家に住ませよう。—— 主の御告げ／ They shall tremble as a bird out of Egypt, and as a dove out of the land of Assyria: and I will place them in their houses, saith the LORD」

(31) 『ナホム書』 2・7：「王妃は捕らえられて連れ去られ、そのはしは鳩のような声で嘆き、胸を打って悲しむ／ And Huzzab shall be led away captive, she shall be brought up, and her maids shall lead [her] as with the voice of doves, tabering upon their breasts」

(32) 『マタイによる福音書』 3・16：「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐ水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった／ And Jesus, when he was baptized, went up straightway out of the water: and, lo, the heavens were opened unto him, and he saw the Spirit of God descending like a dove, and lighting upon him」

(33) 『マタイによる福音書』 10・16：「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようになおでありなさい／ Behold, I send you forth as sheep in the midst of wolves: be ye therefore wise as serpents, and harmless as doves」

(34) 『マタイによる福音書』 21・12：「それから、イエスは宮にはいって、宮の中で売り買いする者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された／ And Jesus went into the temple of God, and cast out all them that sold and bought in the temple, and overthrew the tables of the moneychangers, and the seats of them that sold doves」

(35) 『マルコによる福音書』 1・10：「そして、水の中から上がられると、すぐそのとき、天が裂けて御霊が鳩のように自分の上の下られるのを、ご覧になった／ And straightway coming up out of the water, he saw the heavens opened, and the Spirit like a dove descending upon him」

(36) 『マルコによる福音書』 11・15：「それから、彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮にはいり、宮の中で売り買いしている人々を追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒し、また宮を通り抜けて器具を運ぶことをだれにもお許しにならなかった／ And they come to Jerusalem: and Jesus went into the temple, and began to cast out them that sold and bought in the temple, and overthrew the tables of the moneychangers, and the seats of them that sold doves」

(37) 『ルカによる福音書』 2・24: また、主の律法に「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定められたところから従って犠牲をささげるためであった／ And to offer a sacrifice according to that which is said in the law of the Lord, A pair of turtledoves, or two young pigeons」

(38) 『ルカによる福音書』 3・22: 精霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ／ And the Holy Ghost descended in a bodily shape like a dove upon him, and a voice came from heaven, which said, Thou art my beloved Son; in thee I am well pleased」

(39) 『ヨハネによる福音書』 1・32: またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました／ And John bare record, saying, I saw the Spirit descending from heaven like a dove, and it abode upon him」

(40) 『ヨハネによる福音書』 2・14: 「そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になった／ And found in the temple those that sold oxen and sheep and doves, and the changers of money sitting」

(41) 『ヨハネによる福音書』 2・16: また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない／ And said unto them that sold doves, Take these things hence; make not my Father's house an house of merchandise」

と見てくれば、先ず第一に、『レビ記』が端的に示すように、古代ユダヤの世界では、ハトは「清浄」を意味する唯一の鳥であったと言えよう。換言すれば、「ユダヤ人たちは、神に捧げられる清潔な鳥はハトしかないと信じていた」<sup>(43)</sup>のである。というのも、燔祭や罪祭に於いてハトは「生贄になる唯一の鳥で、出産後の〈不浄〉を消す供え物に用いられた」<sup>(44)</sup>からである。『ルカによる福音書』(2・24)は、産婦の清めの儀式でハトを神への供え物とする古代ユダヤの風習が、新約聖書の世界にも引き継がれていることを示すものである。「清浄」とは「無垢」を連想させるが、「汚れのないもの、私の鳩はただひとり」という『雅歌』(6・9)の言葉は、ハトが「無垢」なる鳥でもあることを示すものである。

次に、ハトが神の愛する者、〈ヤハウェの民の象徴〉として用いられていることは上記の『詩編』や『雅歌』を見れば明らかである。ハトが「生贄になる唯一の鳥」であり、同時に〈ヤハウェの民の象徴〉であるからこそ、「あなたの山鳩のいのちを獣に引き渡さないでください」という『詩編』(74・19)の言葉は「ヤハウェの民が敵の生贄になりそうなことを表している」<sup>(45)</sup>のである。

第三に、ハトはイスラエルでは我が国のウグイスのように春の到来を告げる代表的な鳥である。というのも、「キジバトの鳴き声は冬が終わり、愛のときがやってきたことを示す……パレスチナへ一番早く帰る鳥の一つである」<sup>(46)</sup>からである。「地には花が咲き乱れ、歌の季節がやって来た。山鳩の声が、私たちの国に聞こえる」という『雅歌』(2・12)の言葉は、春告げ鳥としてのハトの役割を示すものである。

第四に、ハトの鳴き声は聞く人によっては哀れに満ちているが、ハト（キジバト）は「哀調深いことを表す」<sup>(17)</sup>鳥でもある。それは「私たちはみな、熊のようにほえ、鳩のようにうめきにうめく」という『イザヤ書』（59・11）の言葉に反映されている。このハトの鳴き声について、ギルバート・ホワイトは「ハトはクークーと言って、情のこもったような、また悲しいような鳴き方をしますが、これは遂げ得ぬ恋を表象するものであります」<sup>(18)</sup>と述べている。

さて、〈平和の象徴〉、〈神に捧げることの出来る唯一の鳥〉、〈ヤハウェの民の象徴〉と見てくれば、ハトは聖書の世界で破格の扱いを受けていると言えようが、それが頂点に達するのは「新約聖書」に於いてである。というのも、ハトは「神の御霊」、聖霊の象徴として用いられているからである。イエスがヨルダン川で洗礼を受けられた時、神の御霊がハトのような形をして天からイエスの上に下られたという話は、上で見たように、四つの福音書に互って述べられている。ちなみに、この新約聖書の記事に基づき、紋章学では「聖霊の鳩は頭を下にして飛んでいる姿で描かれるのが決まり」<sup>(19)</sup>とのことである。

ハトが聖書の世界で、このように高い評価を与えられているのは人間の目に映る外面的な特質のみならず、ハトそのものが持つ内面的な特質とも不可分に連関するものであろう。「鳩のようにすなおでありなさい」（『マタイによる福音書』10・16）というイエスの言葉は、その何よりの証左である。hubris（傲慢、不遜）がヘブライズムとヘレニズムという二大世界で共通する人間の最大罪であったことを思い見れば、イエスの言葉はハトに対する我々の評価を更に一段と押し上げるものであろう。では、ギリシア神話の場合はどうであろうか。

#### （四）

聖書でハトは鳥によって象徴される「闇の暗さ」の後に続く「明るさ」を表し、「神の御霊」の象徴でもあったが、「明るさ」も「神の御霊」も共に天から来るものである。ハトが「ワシとともに、大空—天国を表す最も基本的な象徴の一つ」<sup>(20)</sup>とされているのは、この飛翔力に優れた可憐な鳥と「大空—天国」との密接な結びつきを示す証左である。とはいえ、「大空—天国」から地上に下るものは「明るさ」と「神の御霊」のみではなかろう。「神託」もまた天界から下るものである。したがって、ハトはギリシア神話では天帝ゼウスと結びつき、「天国の知らせをもたらすもの」と見なされ、「巫女は、神託を聞くためにハトの鳴き声に耳を傾けた」<sup>(21)</sup>という。ちなみに、ハトが「死後の魂」を象徴し、「瀕死の殉教者の口より生まれでるハト」<sup>(22)</sup>として絵画によく描かれているのは、地上から大空に向かうハトの姿からの連想であろう。

ギリシア神話に於いてハトが「万物の母＝レア」や「豊饒の女神＝デメテル」と関連を持ち、「バックス（ディオニュソス）のシンボル」<sup>(23)</sup>とされているのは、この鳥の旺盛な繁殖力によるものであろう。『朝日＝ラルース 世界動物百科（鳥類）』によれば、「ハトは一年に数回営巣するものが多い」うえに「繁殖期が季節的に限られている他の鳥と違い、自らのそのうから出る《ハトの乳》でひなを養えるので、あまり季節に左右されずに繁殖のやり直しができる」<sup>(24)</sup>とのことである。イソップは「ハトとカラス」という一寓話の中でハトの旺盛な繁殖力に触れ、それを揶揄の対象としている。というのも、ハトが子供の多さを自慢した時、カラスによって“The larger the number of your family, the greater your cause of sorrow”<sup>(25)</sup>とやりこめられているからである。

ギリシア神話では、ハトは「愛の女神 [アフロディテ＝ヴィーナス] に捧げられた」<sup>(26)</sup>鳥でもあるが、それはこの鳥がとりわけ愛情深い鳥として見なされていたからであろう。pigeon pair（男女の双子を意味する）という成語は、何よりの証左である。というのも、この言葉は「ハトはいつも二個の卵を抱き、それらの卵から雄と雌の雛がかえると思われていた。これらの双子の雛鳥は、その後もずっと相思相愛で一緒に暮らすのだという」<sup>(27)</sup>という故事、迷信に由来しているからであ

る。ハトの習性に関して『朝日＝ラルース 世界動物百科 (鳥類)』は、「ハトの雄は一雌一雄制を厳守し、雌に愛情を示す……繁殖期の間、雄は相手の雌だけにかかりきりである。倦むことなく雌の周囲をまわり、<クークー>と鳴き、尾羽(おばね)をひろげて見せたりする。また雌の頭の羽毛をくちばしでかく相互整羽をしたり、くちばしを開いて雌のくちばしを受け入れ、えさを与えるという育雛(いくすう)の動作をしたりしたのち、交尾が行なわれる」<sup>(32)</sup>と述べている。

### (五)

以上聖書とギリシア神話を概観しただけであるが、どう見ても dove という鳥はプラスのイメージやシンボルで覆い包まれているようである。しかし、総称としてのハトは「臆病」とか「お人よし、ぼんくら」を表す鳥でもある。このマイナスのイメージやシンボルは一体どうなっているのだろうか。その辛い役目を押し付けられているのが pigeon のようである。試しに、研究社の『英和大辞典』を引いてみると、dove は「1 [鳥類] ハト《ハト科の鳥の総称；平和・無邪気・温順・柔和などの表象として用いられる…… a dove of peace 平和のハト. 2 [the Dove] 《天文》はと(鳩)座. 3 [the Dove] 精霊(the Holy Spirit) (cf. *Matt.* 3 : 16) 4 a (Noah に対するハトのように) 吉報をもたらす人、平和の使者 (cf. *Gen.* 8 : 8-12). b [しばしば愛称の呼び掛けとして用いて] 純潔で柔和な人 : my love かわいい人よ. 5 (穩健・平和主義的外交政策を指示するハト派(の人)、和平論者 (cf. hawk 2)」<sup>(33)</sup>と誉め言葉で満ちているのに対して、pigeon は「1 [鳥類] ハト《ハト科の鳥の総称；(特に) イエバト《カワラバト (rock dove) を改良したハト；伝書バト (homing dove, carrier pigeon) など》. \* dove よりも大きく「野生鳩」「家鳩」のどちらにもいう. 2 《口語》だまされやすい人 (gull)、のろま (simpleton) : pluck a ~ のろまから金(など)をだましとる……」<sup>(34)</sup>と、極めて分が悪い。

念のために、ブルーワーの『英語故事成語大辞典』にあたってみても結果は同じである。この辞典によれば、dove は「キリスト教美術においては、ハトは聖霊を象徴し、ハトから射す七つの光線は聖霊の七つの贈り物を象徴している。ハトはまた魂の象徴でもあり、そのゆえに、聖者が死ぬときその口から飛び立つ姿で表されることがある……ハトはまた平和、優しさ、無垢、従順の象徴でもある」<sup>(35)</sup>と述べられているのに対して、pigeon の方は「お人好し、騙されやすい人 GULL を表す俗語。To pigeon は、かなり見え透いた嘘で騙して人から金を巻き上げること。ハト (pigeon) という鳥は、いともたやすく畏にかかるとされる鳥である。賭博の世界では、騙す悪漢とそのえじきとなる人を rooks and pigeons と呼んでいる」<sup>(36)</sup>とあり、しかも「To pluck a pigeon=だまされやすい人から金を巻き上げる」とか「Pigeon-livered=ハトのように、おとなしい、臆病な、という意味」<sup>(37)</sup>という成語の用例まであげられている。

と見てくれば、ただ色の違いのゆえに、「おそらく、鳩 (pigeon) は、白鳩 (dove) にあまねく与えられている役割に辛い思いをしたことであろう」<sup>(38)</sup>と同情されるのも尤もなことであろう。

### (六)

最後に、英米の文学作品に登場するハトについて見てみよう。シェイクスピアの戯曲で dove を見てみると、「ヴィーナスの清浄無垢な鳩にかけて」<sup>(39)</sup> [by the simplicity of Venus' doves]<sup>(40)</sup> (『夏の夜の夢』1幕1場)、「鴉を見限って鳩を愛するのは当然じゃないか」<sup>(41)</sup> [Who will not change a raven for a dove?] (『夏の夜の夢』2幕2場)、「眠っておられますか、わたしの恋しいお方。や、や、これは、なんと息たえていられるとは！」<sup>(42)</sup> [Asleep, my love? / What, dead, my dove?] (『夏の夜の夢』5幕1場)、「女鳩が金色の雛をかえす時のように、じっとおとなしく」<sup>(43)</sup> [as patient as the female dove, / When that her golden couplets are dis-

closed)」（『ハムレット』5幕1場）、「余の女たちに立ち交じって、一きわ目立つあの美しい姿は、まるで鴉の群に伍する、雪を欺く白鳩の風情だ<sup>(40)</sup> [So shows a snowy dove trooping with crows, / As yonder lady o'er her fellows shows]」（『ロミオとジュリエット』1幕5場）、「その白衣の法服にいたしましてからが、明らかに清浄無垢の象徴、平和と幸福、鳩の精霊を現わしたものではありませんか<sup>(41)</sup> [Whose white investments figure innocence, / The dove and very blessed spirit of peace]」（『ヘンリー四世 第二部』4幕1場）等の表現が見られるが、pigeonの方は「おれは鳩のように気が弱い<sup>(42)</sup> [I am pigeon-livered]」（『ハムレット』2幕2場）と形無しである。

アメリカ文学でも「むかしわたしは一匹の獵犬と一頭の栗毛の馬と一羽の雉鳩とをうしない、今でもその行方をさがしている<sup>(43)</sup> [I long ago lost a hound, a bay horse, and a turtle-dove, and am still on their trail]<sup>(44)</sup>」（『ウォールデン』）とか「ジーアは真ん中で折りたたんだ一枚の葉書をポケットから取り出し、レイに渡した。その葉書には、とても青い色をした勿忘草の花輪にとまっている白バトの姿が描かれ、誕生日を祝する言葉が書かれていた [She took from her pocket a postcard, bent in the middle and folded, and handed it to Ray. On it was a white dove, perched on a wreath of very blue forget-me-nots, and "Birthday Greetings" in gold letters]<sup>(45)</sup>」（ウィラ・キャザー、『雲雀の歌』）という文例の中でハトが用いられている。前者に関して、篠田錦策は「この節は恐らく Thoreau が真理を追究している心持を比喩的に書いたものであろう<sup>(46)</sup>と述べているが、後者についても勿忘草の花と共に白バトにも何らかの象徴的な意味が秘められていると言ってよかろう。というのも、この葉書は無垢な少女が永遠に遠くの地に去った年老いた恩師から受け取ったものだからである。ちなみに、ハトがアメリカの象徴としてしばしば用いられたのは、新大陸の発見者であるコロンブス [Columbus] がラテン語で「ハト」を意味するからである<sup>(47)</sup>。以上見たように、全般的に言って、英米文学の世界でも脚光を浴びているハトは dove の方であり、裏方で辛い思いをしているのは pigeon のようである。

## 注

- (1) 『朝日＝ラルース 世界動物百科（鳥類）』（朝日新聞社、昭和47年）、第99号、p. 4.
- (2) 『英語歳時記（雑）』、土居光知・福原麟太郎・山本健吉監修、成田成寿編集、佐山栄太郎執筆（研究社、1969）、p. 63.
- (3) 奥田夏子・山崎喜美子・川崎晶子、『野鳥と文学 日・英・米の文学にあらわれる鳥』（大修館書店、1982）、p. 243.
- (4) 『英語歳時記（雑）』、p. 63.
- (5) 『講談社和英辞典』、清水護・成田成寿編集主幹（講談社、1976）、p. 909.
- (6) ピーター・ミルワード、『聖書の動物事典』、中山理訳（大修館書店、1992）、p. 149.
- (7) ジャン＝ポール・クレベール、『動物シンボル事典』、竹内信夫・柳谷巖・西村哲一・瀬戸直彦／アラン・ロシェ訳（大修館書店、1971）、p. 186.
- (8) アト・ド・フリース、『イメーシ・シンボル事典』、山下主一郎主幹、荒このみ・上坪正徳・川口絃明・喜多尾道冬・栗山啓一・竹中昌宏・深沢俊・福士久夫・山下主一郎・湯原剛訳（大修館書店、1984）、pp. 184-186.
- (9) クレベール、p. 187.
- (10) 『広辞苑』、新村出編（岩波書店、1983）、p. 1950.
- (11) 本書に於ける聖書の和訳は『新改訳聖書』（日本聖書刊行会、1970年）から参考までに引用したものである。

- (12) クレベール、p. 111.
- (13) 荒俣宏、『世界大博物図鑑』、第4巻 [鳥類] (平凡社、1987)、p. 193.
- (14) フリース、p. 185.
- (15) フリース、p. 657.
- (16) フリース、p. 657.
- (17) フリース、p. 657.
- (18) ギルバート・ホワイト、『セルボーンの博物誌』、西谷退三訳 (博友社、1964)、p. 438.
- (19) クレベール、p. 187.
- (20) フリース、p. 184.
- (21) フリース、p. 185.
- (22) フリース、p. 185.
- (23) フリース、p. 185.
- (24) 『朝日=ラルース 世界動物百科 (鳥類)』、第99号、p. 2.
- (25) "The Dove and the Crow" in *Aesop's Fables* (Project Gutenberg, 1994).
- (26) フリース、p. 184.
- (27) E. C. ブルーワー、『ブルーワー英語故事成語大辞典』、加島祥造主幹、鮎沢乗光編集、鮎沢乗光・伊藤泰雄・岡田岑雄・小澤喬・内藤純郎・並木慎一・水脇準・宮本三恵子・吉田尚子訳 (大修館書店、1989)、pp. 1344.
- (28) 『朝日=ラルース 世界動物百科 (鳥類)』、第99号、p. 4.
- (29) 『新英和大辞典』第5版、小稻義男編集主幹 (研究社、1986)、p. 624.
- (30) 『新英和大辞典』第5版、p. 1600.
- (31) ブルーワー、p. 546.
- (32) ブルーワー、p. 1343.
- (33) ブルーワー、p. 1344.
- (34) クレベール、p. 285.
- (35) 『夏の夜の夢』、平井正穂訳『シェイクスピア全集 喜劇Ⅰ』(筑摩書房、1987)、p. 221.
- (36) *Midnight Summer Dream* (1, 1) in *The Complete Works of William Shakespeare: His Plays and Poetry* (Creative Multimedia Corporation, 1992). 以下シェイクスピアからの英語の引用文はこの CD-ROM 判による。
- (37) 『夏の夜の夢』、p. 232.
- (38) 『夏の夜の夢』、p. 257.
- (39) 『ハムレット』、三神勲訳『シェイクスピア全集 悲劇Ⅰ』(筑摩書房、1985)、p. 293.
- (40) 『ロミオとジュリエット』、中野好夫訳『シェイクスピア全集 悲劇Ⅰ』(筑摩書房、1985)、p. 89.
- (41) 『ヘンリー四世 第二部』、中野好夫訳『シェイクスピア全集 史劇Ⅰ』(筑摩書房、1982)、p. 250.
- (42) 『ハムレット』、p. 251.
- (43) ソーロー、『森の生活——ウオールデン——』、神吉三郎訳 (岩波文庫、1983)、p. 35.
- (44) Henry D. Thoreau, *Walden in The Writings of Henry D. Thoreau*, edited by J. Lyndon Shanley (Princeton; Princeton Univ. Press, 1973), p. 17.
- (45) Willa Cather, *The Song of the Lark* (Lincoln; University of Nebraska Press, 1973), p. 107.
- (46) *Walden* by Henry D. Thoreau (研究社英米文学叢書——30) 篠田錦策注訳 (研究社、1974)、p. 351.
- (47) 井上義昌、『英米故事伝説辞典』(富山房、1976)、p. 188.

平成9年(1997)年9月29日受理

平成9年(1997)年12月25日発行